

# 心理測定と社会の計量

**私**は長らく心理学系の学科に属し、そこで30年以上にわたり心理統計学関連の教育と研究に従事してきた。還暦を目の前に社会学系の学部に移り、そこで社会調査士関連、主に統計学系の講義と実習を70歳の定年まで担当した。分野を超えた異動にあたってそれほどの不安も覚悟もなかったのは、「心理統計学」と「社会統計学」の違いを過小評価していたからである。

細かい相違はさておき（教育上は無視できないものも多いが）、大きな違いは心理学と社会学における計量の目的の差異に起因する。心理学における測定方法の開発の出発点は、ある程度事前に想定された次元上での個人差の査定（assessment）にあり、それは現在でも教育評価や臨床診断において重要な役割をになっている。対する社会学では、社会問題の解決を目指すために広く社会の実情を認識し記述することが調査の目的であり、分析はそのための手段となる。

したがって、データに対して要請される条件も自ずと異なってくる。心理測定では、第一義的には個人レベルでの測定の正確さ、通常、信頼性と妥当性と呼ばれる性質の向上が目指される。社会調査では多様な内容を大づかみに理解するための視覚化を含む計量と、因果関係の推測であろうか。実際、パス解析の利用は心理学よりずっと早かった。

私がかつて、因子分析等の手法を用いて構成された複数の質問項目への反応を合成してスコアを求める心理測定尺度から、1項目だけ抜き取って社会調査の調査票に含めるやり方に疑問

をもち、学会で発表者にかみついたことがある。しかし、これは社会調査データの分析経験に乏しい者の戯言だったと今では反省している。心理測定の（たとえば5段階評定の）項目を3つも含めて、たとえば多重対応分析を行えば、カテゴリーの2次元布置は、それら3項目の反応カテゴリーからなる2次曲線（いわゆる馬蹄現象）に占領され、他の質問やデモグラフィックな変数の反応カテゴリーは、原点付近に集中して解釈不能になってしまう。

つまり、内容的に類似度の高い質問を束にして信頼性を高めようとする心理測定尺度の項目間の相関関係は、通常、社会調査に含められる質問項目の間の相関よりもほぼ一貫して高く、カテゴリーの共起（cooccurrence）にもとづく分析方法では、それだけが目立つことになるのである。

心理学研究では近年、因子分析にパス解析を組み込んだような構造方程式モデリングが流行している。上記のようなデータの性質の違いから、これをそのまま社会調査の分析に取り入れることは適切とは言えないであろう。しかしながら、双方の違いを十分に理解した上での共同研究等を通じて、2つの領域間の対話が行われることは望ましいことであると考えている。個人の生育環境や現に置かれている社会経済的条件を無視したアセスメントには、誤った対応・介入につながる恐れがある一方、心理的・身体的個人差を考慮に入れることなしに解決できる社会問題も存在しないと思うからである。

村上 隆

中京大学文化科学研究所 特任研究員